

## 東天山地域の月氏と匈奴

王 建新

東天山地域とは、天山山脈の東部、天山南側のハミ盆地と北側の巴里坤―伊吾草原及びその周辺地域である。月氏と匈奴は、紀元前一千紀後半にユーラシア大陸北方草原地域に登場した古代遊牧民族である。紀元前三世紀頃、月氏は匈奴より強大であったが、紀元前二世紀前半に入ると、月氏は匈奴に破られたため、大部分の人が最初はイリ川流域、続いて中央アジアの西天山地域へと逃げ、大月氏となった。『史記』『漢書』などの文献によって、月氏の原住地は「敦煌・祁連間」と記載されている。では、「敦煌・祁連間」とは、いったいどの地域を指すのであろうか？

## 一、「敦煌・祁連間」について

敦煌は『漢書』地理志に「敦煌郡は、武帝後元年（前八八年）、酒泉を分かちて置く」と記載があり、『漢書』武帝

紀には、元鼎六年（前一一一年）の記事として「乃ち武威・酒泉の地を分かちて張掖・敦煌郡を置き、民を徙して以てこれを実す」とある。武帝の時期に設置された河西四郡のうち、先に設置された酒泉・武威という二郡の地名の漢字には意味があるが、後に設置した張掖・敦煌という二郡の地名は、漢字の意味がなく、異民族の地名の音読みと言える。また、敦煌という地名は、『史記』大宛列伝に以下のようにあらわされる。

大宛之跡、見自張騫。……騫身所至者大宛・大月氏・大夏・康居、而伝聞其傍大國五六、具為天子言之。……始月氏居敦煌・祁連間……是歲太初元年（前一〇四年）也。而閼東蝗大起、蜚西至敦煌。……貳師將軍軍既西過塩水……引兵而還、往來二歲。還至敦煌……因留敦煌。……初、貳師起敦煌西……（『史記』大宛列伝）

司馬遷は、張騫が敦煌は月氏の故地であり、貳師將軍李広利が大宛に攻めたときの後方基地も敦煌にまで及んでいたと述べたことを、記録している。しかし、『漢書』武帝紀には、李広利が大宛へ攻めたときに、敦煌郡は既に設置されていたとある。そのため、漢の敦煌郡すなわち現在の敦煌を月氏の故地の界の一つであるとするときには疑問が生ずることとなる。

つぎに、祁連について、『漢書』霍去病伝の「(武帝元狩二年・前一二一年) 其夏……去病与合騎侯俱出北地、異道……去病至祁連山、捕首虜甚多」という記載に対して唐・の顔師古は「祁連山即天山也、匈奴呼天為祁連」と注を付けている。また、『漢書』張騫伝には「(烏孫王) 昆莫父難兜靡本与大月氏俱在祁連・焞煌間」とあり、顔師古は「祁連山以東、焞煌以西」としている。『漢書』武帝紀の「(天漢二年・前九九年) 夏五月、貳師將軍三万騎出酒泉、与右賢王戰於天山」という記述に対して顔師古は、「(天山) 即祁連山也、匈奴謂天為祁連。……今鮮卑語尚然」と注を付ける。

古代の匈奴は、鮮卑の祖先である東胡と、地域的に近く、また文化的にも近いと考えられる。その後、後漢時代に中国の北方地域で強大になった鮮卑人は、匈奴の故地を占領し、大量の匈奴人も受け入れたので、匈奴語が鮮卑語と通じるのは、おかしくない。顔師古の時代に、鮮卑人がすでにいなくなったとは言えず、その言語も存在していたはず

なので、顔師古が鮮卑語によって匈奴語を論証したことは、合理的である。

天山は、『史記』・『漢書』および『塩鉄論』など漢代の文献には、祁連山・天山及び祁連天山と記録されている。たとえば、元狩二年(前一二一年)に霍去病が天山まで匈奴を攻めたことについて、『史記』の匈奴列伝・大宛列伝・衛將軍驃騎列伝と、『漢書』の霍去病伝・張騫伝・匈奴伝などは、「祁連山」と記述しているが、『塩鉄論』誅秦では、「祁連天山」と記述している。天漢二年(前九九年)に李広利が匈奴の右賢王と天山で戦ったことについて、『史記』の匈奴列伝と『漢書』の武帝紀・匈奴伝・李陵伝などでは、「天山」と記述されているが、『史記』の李將軍列伝と『塩鉄論』西域では、「祁連天山」と記述している。「祁連(祁連山)」とは、異族の言葉の音の漢字表記で、「天山」とは、同じ異族の言語を漢字に翻訳した表記であり、「祁連天山」とは、翻訳した漢字の名称の上にさらに元の音の漢字表記を加えた言い方であることが考えられる。それらはみな漢代における天山の名称で、現在の河西回廊にある祁連山と、まったく関係がなかったのである。現在の祁連山は、漢代に「南山」「漢南山」と呼ばれたのである。表1のように祁連山と南山とも、同じ時期の同じ文献に別のものとして書かれている。南山は現在の祁連山であることは間違いないく、漢代の祁連山は現在の祁連山ではないのである。現在の祁連山が漢代の南山から改称したことは、おそらく小月

表 1 南山・漢南山と祁連山

並南山，欲從羌中歸，復為匈奴所得。	『史記』大宛列伝・『漢書』張騫伝
(月氏) 其余小衆不能去者，保南山羌，号小月氏。	『史記』大宛列伝・『漢書』西域伝
西域…南北有大山，…其南山，東出金城，与漢南山属焉。	『漢書』西域伝
是歲（元狩二年），漢遣驃騎破匈奴西城（域）数万人，至祁連山。其明年，渾邪王率其民降漢，而金城・河西，西並南山至塩澤，空無匈奴。	『史記』大宛列伝
是歲，驃騎將軍破匈奴西邊，殺数万人，至祁連山。其秋，渾邪王率衆降漢，而金城・河西，並南山至塩澤，空無匈奴。	『漢書』張騫伝

氏が南に移住したときに地名も移動したのかもしれない。同じようなことは歴史上、常に見られるものである。班固は『漢書』を記した際に、この理由がはっきりとわかっていたが、南朝の范曄は『後漢書』を著した時に、北朝に属した現地を調査することができず、すでに地名の変化について分からなくなっており、今の祁連山を漢代の祁連山と誤解したのである。つまり、『後漢書』西羌伝の「湟中月氏胡、其先大月氏之別也、旧在張掖・酒泉地」という説は、文献に見られる月氏の故地に対する最初の誤解であったと言える。

隋唐時代に至ると、月氏を中央アジアに生活していたソグド人の先祖とみなし、ソグド人が張掖の昭武城から西に移った「昭武九姓」という語が文献に現れた。ソグド人が幾つかの部落に分けられ、九姓と言ったが、彼らが昭武城から出たという説は、月氏故地に対する誤解から生まれたものである。のちに唐の張守節が『史記』正義で「初、月氏居敦煌以東、祁連山以西。敦煌郡今沙州、祁連山在甘州西南」と記したのは、范曄の誤解が『史記』の注釈に影響を与えたと考えられる。このような誤解が今でも広く知られ、多くの学者に影響を及ぼした。このため、多くの考古学者が河西回廊に月氏の考古学文化を探る調査をおこなってきたが、彼らが確実的な成果を得られるはずはなかったのである。

二〇世紀初頭、中国と日本の学者は、月氏とその故地について論じた。藤田豊八「月氏の故地とその西移の年代」『東洋学報』六一、一九一六年、のち『東西交渉史の研究』荻原屋文館、一九四三年所収）では、月氏の故地を敦煌の西にあると考える視点が示された。二〇世紀の末から今世紀にかけて、余太山・林梅村及び著者等の中国の学者らは、史学・言語学・考古学などの立場から、月氏の故地が河西回廊ではなく東天山地域にあるという視点を発表した。

このような議論に関連して、近年、発表された敦煌懸泉置遺跡から出土した竹簡に、河西回廊の地名とその間の距

敦煌懸泉置出土「里程簡」(TI 90 DXTD 214①: 130 A)

倉松去鸞鳥六十五里 至池去燉得五十四里 玉門去沙頭九十九里  
鸞鳥去小張掖六十里 燉得去昭武六十二里府下 沙頭去乾齊八十五里  
小張掖去姑臧六十七里 昭武去祁連置六十一里 乾齊去淵泉五十八里  
姑臧去頭美七十五里 祁連置去表是七十里 ●右酒泉郡県置十一●六  
百九十四里 (敦煌懸泉置漢簡「秣」上海古籍出版社、二〇〇一年)

居延出土「里程簡」(EPT 59: 582 第二欄)

燉得至居延置九十里、刪丹至日勒八十七里  
居延置至燉里九十里、日勒至鈞著(著)置五十里  
燉里至僭次九十里、鈞著(著)置至屋蘭五十里  
僭次至小張掖六十里、屋蘭至至池五十里  
〔居延新簡 甲渠候官与第四燧〕文物出版社、一  
九九〇年)

離を記録した「里程簡」という新しい資料があり、そこからは、新たな問題も出てきた。

この里程簡には、「祁連置」についての記録が残されている。その方位と距離から推算すると、河西回廊の西部に位置していることは疑いない。しかし、祁連置は必ず祁連に設置しなければならないのであろうか？ 漢代の置は、駅と兵站の機能を兼ねて道路の傍に設置された機関である。発掘調査された敦煌の懸泉置遺跡には、居住跡と倉庫跡も発見され、明らかに置の特徴を示している。これらの置は、所在地名を置の名称としたものもある。たとえば懸泉置が懸泉にあることと同様である。しかし、名称の置は実際のところ設置されてないこともある。居延から出土した漢代の一つの木牘に、長安から河西回廊までの地名と距離を記録したいわゆる「里程簡」もある。居延漢簡の「里程簡」は、居延置も記録している。漢代居延の位置については、文献にも考古学資料によっても、いまの内モンゴル西部の額濟納旗にあることは間違いない。しかし、

居延の「里程簡」に記録された居延置の位置は、河西回廊の西部に位置する。両者の間の距離には数百キロがある。これはどのような原因からであらうか。

武帝時代、対匈奴戦争のなかで、まず河西回廊を占領し、武威・酒泉・張掖・敦煌の四郡を設置した。そのとき、居延と祁連(天山)とも、まだ対匈奴戦の前線であり、より近いところの河西回廊でこの二方面作戦の軍隊のために、補給基地を作る必要があった。居延置は居延方向作戦の軍の補給基地、祁連置は祁連(天山)方向作戦の軍の補給基地であったと判断できる。そのゆえ、居延置が居延にはなく、祁連置も祁連(天山)にはないことを理解することができる。

河西回廊の地理環境から見ると、張掖を中心として、東部と西部の二つに分けることができる。東部には、今の張掖・武威・金昌・山丹・永昌・民衆・民勤などを含め、山の間に草原が存在しており、遊牧生活に適するところであ

る。ここでは、秦から漢の初めごろ、匈奴がこの地域を占領して、南の羌人と繋がり、漢王朝が西域へ往来する通路を挟めたのである。元狩二年の春、霍去病がまず攻めたのは、河西回廊東部に存在していた匈奴である。匈奴の一つの聖地であった焉支山も、この地域にある。この地域では、考古調査で発見された戦国時代からの沙井文化が遊牧文化の特徴を表している。しかし、この地域に存在していた匈奴の文化についての考古調査は、まだ不足しており、そこで匈奴文化を確認してはいない。河西回廊の西部は、今の酒泉・嘉峪関・玉門・安西・敦煌などを含めた地域で、広大な面積のゴビを基盤として、その上に水源に従ってオアシスが点と線のように分布している。このような地理環境は、新疆南部のタクラマカン砂漠に非常に似ているが、地質基盤はゴビと砂漠との違いがある。範囲が制限されたオアシスは、農業あるいは半農半牧の定居生活に適しているが、広い範囲で移動する人数がより多い遊牧民の生活にとっては、限定条件とはならない。今までのこの地域における考古発見から見ると、今より四千年前の馬廠類型晩期文化から、四千年から三千年までの四壩文化、および紀元前千年紀の鬲馬類型文化などの史前文化には、遊牧文化の特徴が見えず、すべて定住の農業と牧業を主にした文化である。

漢王朝によって設置された河西四郡の時代から近代まで、河西回廊西部のオアシスに生活していた住民は、やはり定

住農業を主としていたのである。史前時代にも歴史時代にも、河西回廊の西部地域において、大規模な遊牧経済は存在することがなかったのである。月氏は人口が多い遊牧部族のため、遊牧経済に適していない河西回廊の西部地域を中心地域としていた可能性は全くないと思われる。いずれにしても張騫らが言う月氏故地の「敦煌・祁連間」は、河西回廊の西部ではなく、敦煌と天山の間即ち東天山を中心とする地域に存在していたと判断することができる。また、『漢書』西域伝によれば、当時の天山（祁連山）とは、東天山に限り、その西の天山山脈を含んでいなかったのである。東天山地域の地形環境は、天山山脈の北側には、巴里坤―伊吾草原があり、北東にモンゴル草原と繋がり、北西にジュンガル盆地の東側にあるアルタイ山と天山の間の荒漠草原の地帯である。天山の南側には、ハミ盆地があり、南はロプノールと繋がり、南東に敦煌を遠望し、西に吐魯番―鄯善盆地へと繋がり、南西にタリム盆地を遠望することができる地域である。

匈奴の老上单于の時期（紀元前一七四―前一六一年）に、月氏に対する徹底的な戦争が東天山地域で起きた。大部分の月氏人つまり夏の牧場で活動していた青壮年たちは、匈奴の進攻に負けて、月氏の王も殺され、西のイリ川流域に逃げ、大月氏となった。一部の月氏人つまり冬の集落に残された高齢者、子供及び女性とくに妊娠中の女性たちは、移動が不便なので、現地に残され、小月氏となったのであ

る。匈奴は東天山地域を全面的に占領した。その後、前漢の武帝時代から後漢時代にかけて、漢王朝は東天山地域の匈奴に対する戦争を何度も起こしたが、そのうち文献に記録されている大きな戦争は六回ほどである。

① 武帝元狩二年（前一二一年）夏の戦争

『史記』匈奴列伝・大宛列伝・衛將軍驃騎列伝と『漢書』霍去病伝・張騫伝・匈奴伝及び『塩鉄論』誅秦などの文献には、元狩二年の夏、驃騎將軍霍去病が匈奴の右部を攻めて、祁連山（東天山）まで至った戦争を記述している。

『漢書』霍去病伝には、

其夏、去病与合騎侯敖俱出北地、異道。……而去病出北地、遂深入、合騎侯失道、不相得。去病至祁連山、捕首虜甚多。上曰、票騎將軍涉鈞耆、濟居延、遂臻小月氏、攻祁連山、揚武乎鱗得、得單于單桓酋涂王……合騎侯敖坐行留不与票騎將軍会、当斬、贖為庶人。

とある。一般的な説は、霍去病が河西回廊を経て、まず北の居延に至り、それから南へ戻って、張掖付近の祁連山を攻めたというものである。しかし、霍去病の路線は当時の実情から見ても、軍事上から見ても、非常に疑問である。一方、合騎侯公孫敖の路線については、どの辺にあるか、どういう原因で遅れたのか、何も解釈していない。筆者は、霍去病のルートは北地―鈞耆―居延―小月氏―祁連山（東天山）、公孫敖のルートは北地―隴西―河西走廊―祁連山（東天山）であったと考えている。

② 武帝天漢二年（前九九年）秋（夏）の戦争

『史記』匈奴列伝・李將軍列伝と『漢書』武帝紀・匈奴伝及び『塩鉄論』西域には、天漢二年の秋あるいは夏に、貳師將軍李広利が匈奴の右賢王と東天山で戦ったことを記述している。

③ 宣帝本始二年（前七二）から三年までの戦争

『漢書』匈奴伝・宣帝紀・西域伝などには、本始二年から三年にかけて、漢の軍隊が烏孫の軍隊と連合して、東天山北麓の蒲類澤（今の巴里坤湖）の近辺にある匈奴の右谷蠡王の王庭を攻めたという記載がある。

④ 明帝永平十六年（後七三年）の戦争

『後漢書』竇融伝付竇固伝によって、永平一六年に奉車都尉竇固と騎都尉耿忠が、東天山まで北匈奴の呼衍王と戦ったとある。『後漢書』には「固、忠至天山、擊呼衍王、斬首千余級。呼衍王走、追至蒲類海」との記述がある。

⑤ 和帝永元五年（九三年）の戦争

『後漢書』南匈奴伝・耿种伝および巴里坤で発見された後漢時代の「任尚碑」には、永元五年に中郎將任尚と長史王輔などが、蒲類海の近辺で北匈奴の単于於除鞬を殺したとの記載が残されている。

⑥ 順帝永和二年（一三七）の戦争

清の雍正七年（一七二五年）に巴里坤の石人子村で発見された後漢時代の「裴岑紀功碑」には、  
惟漢永和二年八月、敦煌太守云中裴岑將郡兵三千人、

誅呼衍王等、斬馘部衆、克敵全師。除西域之災、饑四郡之害、辺境文安、振威到此。立海祠以表万世

と刻まれている。これは、文献に記録がないため、非常に貴重な資料である。また、この石碑を発見した場所は、石人子溝遺跡であり、大変意味がある。

以上に挙げた東天山地域での漢と匈奴の戦争は、ほとんど夏の季節に山の北側で発生したので、前漢時代の匈奴の右賢王・右谷蠡王・单于单桓酋涂王、後漢時代の北匈奴单于・呼衍王などの高級貴族と関連するから、前漢時代の匈奴右部の夏の王庭、後漢時代の北匈奴呼衍王の王庭、一時的な单于庭などの中心集落は、現在東天山北側にある巴里坤県境内に位置していると推定できる。

## 二、東天山地域で発見された二種の早期遊牧文化について

一九九九年から現在まで、西北大学は新疆文物考古研究所および甘肅省文物考古研究所と協力して、東天山地域の考古学調査をおこない、三二六ヶ所の古代遊牧文化の遺跡を発見し、この地域に二種の早期遊牧文化が分布していることを確認した。

### ① 第一種文化（紀元前八世紀頃から前二世紀まで）

冬の集落遺跡は、主に山脈の南麓地帯の太陽を受け、風を避け、水源の存在する場所に分布し、その位置は、往々



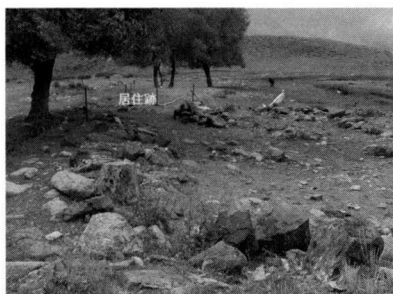
ハミ太陽溝遺跡住居跡・墓



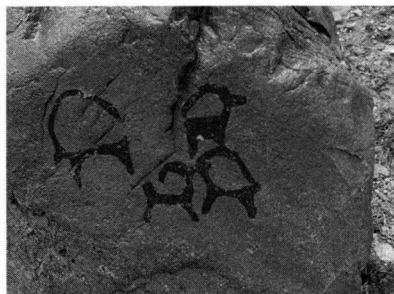
ハミ太陽溝遺跡住居跡・墓

に近代の遊牧民の冬の居住地と重なる。その中の小型集落遺跡は、一般的に少量の居住跡と墓が分布して、岩画もよく見られるのである。例えば、ハミ太陽溝遺跡などがその類型に含まれる。

大型と中型の集落遺跡は、規模が大きく、居住跡と墓の数も多く、一基あたりの居住跡の面積が数百平方メートルに至り、石で組み合わされたより高い壁もよく残されている。墓の数は数百から千基以上を数え、大量の岩画も分布している。第一種文化は、巴里坤の岳公台―西黒溝遺跡群とハミの西山遺跡及び伊吾のバイチル墓群（二〇



ハミ太陽溝遺跡住居跡



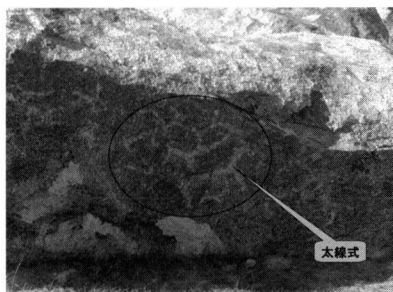
ハミ太陽溝遺跡岩画



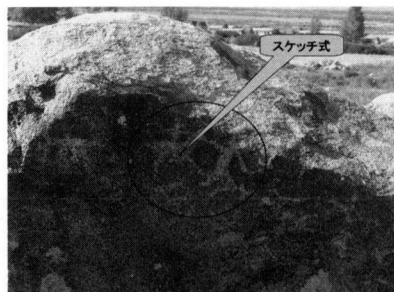
西山遺跡



岳公台遺跡（墓）



岳公台遺跡岩画①



岳公台遺跡岩画②





バイチル墓群



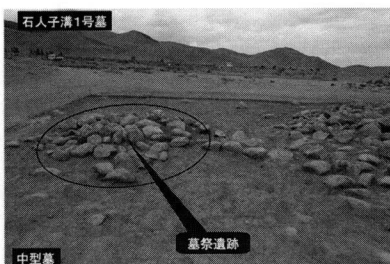
バイチル墓群 91 号墓

〇四から二〇〇五年まで、道路工事中に新疆文物考古研究所によって発掘調査がおこなわれ、九三基の墓が発掘）などが代表的である。その特徴は、墓の地表に墳丘が無いことや、埋葬品として木製の葬具・青銅器・玉器および土器等が含まれることなど。なお、岩画については、簡略で静態的、石の道具で彫刻したもので、太線式・スケッチ式が見られる。

① 第一種文化は、紀元前千年紀の間に東天山地域で継続して発展してきた現地の伝統的な文化で、遺跡の立地、副葬品の種類、人骨に対する分析資料などによって、遊牧文化であったと確認できる。第一種の早期遊牧文化は、ハミ盆地のオアシスで発見された焉不拉克（エンブラーク）、五堡、艾斯克霞尔（アイスコシャール）など遺跡を代表とする同時期の農耕文化との関係が深く見られる。陶器・木器・金属器など古代遊牧民の用具の多くは、農耕民から得られた可能性が高い。この時期の東天山地域には、遊牧民と農耕民が同一の政治体の下で生活していた可能性が高く、山の麓と草原地域に生活している遊牧民が、盆地のオアシスに生活している農耕民と、平和的に共存していたことを推測することができよう。

② 第二種文化（紀元前二世紀から紀元二世紀まで）この文化の遺跡は、主に東天山の北麓に分布して、ほとんど大型と中型の集落である。遺跡としては、巴里坤の紅山口―石人子溝（東黒溝）遺跡群がその代表である。石人子溝遺跡は二〇〇五年の調査によって、居住跡一四〇基余り、墓一六六六基、岩画二四八五ヶ所が発見されている。第二種文化の特徴は、墓に卵石の墳丘があることや、墓祭遺跡の発見、幼羊の骨・馬骨、木製葬具、土器、金銀製品、怪獣紋の金箔・銀箔が出土している点などが挙げられる。岩画については、洗練され、動態的で金属の道具で彫刻したスケッチ式のものであることが特徴的である。

③ 二種文化の関係について東天山地域に発見された二種の早期遊牧文化の年代については、第一種文化に属する岳公台―西黒溝遺跡群の蘭州



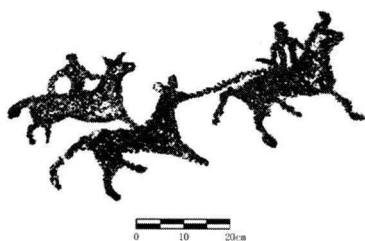
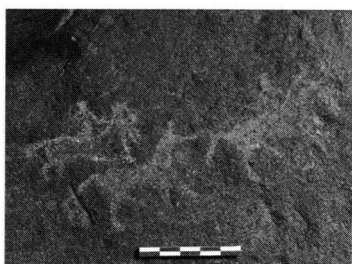
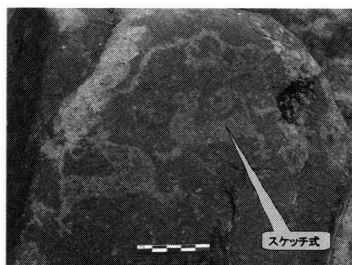
石人子溝1号墓



紅山口一号地点の住居跡

紅山口三号地点墓葬

湾子という遺跡で発掘調査された一基の居住跡から出土した銅鍔と環首銅刀子の形式を見ると、紀元前六世紀ごろの北方の草原地域に流行したことが考えられる。同じ文化に属するバイチル墓地の四九号墓も、環首銅刀子が出土し、その形式はやや遅く、紀元前五世紀前後である。前述したように、この文化の陶器は、ハミ盆地に存在している焉不拉克（エンブラーク）文化の陶器と密接な関係があるので、焉不拉克文化の測定年代の上限が紀元前八世紀前後であるから、この文化の年代上限も紀元前八世紀に至る可能性がある。紅山口一石人子溝遺跡群の東約二〇キロのところ、一九九〇年代に黒溝梁という墓地を発掘した。墓の形式も副葬品の内容も、石人子溝の墓とほぼ一致して、同じ時期の第二種文化に属することが判断できる。黒溝梁墓地では、二基の墓から中原式羽状地紋銅鏡の破片が出土した。この式の銅鏡は、中原地域での流行時間が戦国晩期から前漢初期、即ち紀元前三世紀から二世紀までの期間なので、第二種文化の年代上限もこの時期を超えないはずであろう。さらに、石人子溝の墓から収集した人骨を年代測定した結果、今より二二〇〇±七〇年なので、遺物からの考古学的判断と、文献に記録している匈奴が東天山地域を占領した年代とも、一致している。さらに注意しなければならないことは、石人子溝遺跡の墓と黒溝梁墓地の墓とも、墳丘の下ある



石人子溝遺跡の岩画

いは墓坑の中に、墓祭の犠牲者の人間の骨をばらばらに埋葬したことが発見されている。犠牲者の人骨とともに、工具や飾り物など日常用品もよく一緒に埋められ、破片にした陶器を人骨と埋葬されたことも見られる。犠牲者の人骨と共にある器物は、第二種文化の墓主の副葬品と明らかに違って、第一種文化に属する遺物であることが考えられる。このような現象は、第二種文化を代表する集団が第一種文化を作った集団を征服した歴史を語っているのであろう。それは、地域も年代も、匈奴が東天山地域で月氏を征服した歴史と、驚くほど一致している。

### 三、結びとして

本稿の内容は以下のようにまとめられる。

- ① 東天山地域の考古学発見からみると、古代遊牧民の集落遺跡が確かに存在している。さらに冬の集落と夏の集落は、分布の地域も集落の形式も異なる。冬の集落は山の南に分布して、大量の小型遺跡と少数の大中型遺跡が存在している。夏の集落は山の北側に分布して、主に大中型遺跡で、小型遺跡は少ない。

- ② 紀元前八世紀頃から前二世紀まで東天山地域に存在した第一種の早期遊牧文化は、その集落遺跡が東天山の南北に分布している。紀元前二世紀頃から紀元二世紀まで東天山地域に存在した第二種の早期遊牧文化の集落は、

主に山の北側に分布して、ほとんど大中型遺跡である。

- ③ 今までの考古学の資料によって、東天山地域の第二種早期遊牧文化は、匈奴に残された文化であると確認できる。そのうち、巴里坤の紅山口―石人子溝遺跡群は、前漢時代の匈奴右部の夏の王庭で、後漢時代の北匈奴の呼衍王の王庭であって、一時的に単于庭としたこともある。
- ④ 東天山地域の第一種早期遊牧文化は、月氏に属する可能性が非常に高い。そのうち、巴里坤の岳公台―西黒溝遺跡群は彼らの夏の王庭で、ハミの西山遺跡は彼らの冬の王庭であったと考えられる。

\* 本稿は、二〇一一年二月二五日に学習院大学で開催した国際シンポジウム「衛星データと中国古代陵墓の世界」の特別講演としておこなわれたものである。日本語原稿の作成は著者自らがおこない、村松弘一（学習院大学）が校訂した。